

「選択の自由」はなぜ・どのように放棄されるべきか

壁谷 彰慶 (Akiyoshi Kabeya)

東洋英和女学院大学人間科学部

本発表は、自由意志論における「選択の自由」の発想（以下「選択」と略記）を、時間的推移に関する問題に注目し、代案の方針を検討することを目的とする。

背景となる問題設定を手短に述べておく。自由意志論は諸要因の絡み合いゆえ複雑化しているが、次のように整理したい。まず、意志の自由（自由意志）を、ここでは「自らで意に適った仕方での意志形成すること」として理解する。よって、ここに含まれる「自らで」と「自らの意に適った仕方での」の二つの特徴づけ（「起点性」と「自律性」とする）を満たす仕方での意志形成の可能性の成否とさらなる概念分析が、自由意志論の中心課題となる。この課題は、従来、二つの問題圏によって展開してきた。単一の因果連鎖の中で行為者と意志の因果的関与を主題化する問題圏（「源泉問題 source problem」）と、複数の可能性に対する制御を主題化する問題圏（「余地問題 leeway problem」）とである。「選択」は後者において、特に自律性（「L 自律性」）において固有の問題を提示する。「自らの意に適った仕方での」意志形成をなすことに対し、その反証条件を操作可能な仕方での示す説明図式を提供し、さらにその「世界の分岐」という形而上学的含意に関し、決定論的世界像との対立点を顕著にするからである。

よって「選択」は、両立論への支持をもって自由意志の特徴づけから棄却されてもきたが、その発想について考慮すべき困難は、形而上学的含意ではなく、より内在的な要因だと考える。「選択」は、選択肢が開かれた状態と、そのうちの 하나가採用される状態との、二段階の「コマ」による意志形成の描写である。各々のコマはある時点の世界状態の描写であるが、先のコマに操作対象として登場する選択肢は、次のコマに表われる後続時点の世界状態を確定的に補足しなければならない。この描写では、選択肢の採用が、後続時点の世界状態を確定するとされるからである。だがこれは奇妙である。選択の遂行に先立ち、先行時点に入手可能な選択肢として、後続時点の世界状態は確定済みとされるからである。つまり「選択」は、意志形成の説明でありながら、説明項となる意志内容の事前の確定性を求める点で、説明上の循環がある。

この循環は、「選択」および「選択肢」の発想が、「先行時点における後続時点の行為の選択が、後続時点が現実になったときの世界のあり方を確定する効力をもつ」という前提（「効力前提」）を採用することに由来する。私見では、この前提は決定論的問題を生む主要因であるが、自由意志概念からは切り離せる。よって、少なくとも自由意志の概念分析に関しては、両立論への支持表明の前に、「選択」に内在するこの前提を検討し、その代案の方針を明確化することが求められる。

そこで効力前提の反省を、次の見立てに基づいて試みる。上記の循環は、「選択」が、時間的推移の前後で生じる相違を捨象した描写であることに起因しているとの見立てである。ところで「選択」が描写する意志形成は、「意図」の制御でもあり、説明項となる個々の選択肢は、行為者の意図内容を視覚化したものでもある。よって、もっかの効力前提の検討は、端緒に先行時点の意図主体を、末端に後続時点の意図内容を配

置した単線によって意図状態を描写する様式について、その同一性を、先行時点と後続時点の間の各々の観点から対比的に検討することで果たされることになる。

ここで参考にするのは、Graff (2003)の欲求帰属言明(「欲求文」)に含まれる確定記述の扱いを巡る言語哲学的考察である。そこでは確定記述を含む欲求文("Harry wants Harry to be the mayor of Kenai")の多義性が、未来時制(futurity)を加味して分析される(pp. 147ff.)。その欲求文の定式化に倣うと、標準的な意図帰属言明(「意図文」)"S₁ intends that S₂ do the action"について、次の三つの式が得られる。

[a] [the action] $\hat{\phi}$ Int(S₁, <FUTURE> S₂ do ϕ)

[b] Int(S₁, [the action] $\hat{\phi}$ <FUTURE> S₂ do ϕ)

[c] Int(S₁, <FUTURE> [the action] $\hat{\phi}$ S₂ do ϕ)

"[the action] $\hat{\phi}$ "は、確定記述[the action]が変項 ϕ を束縛する作用域を表わす。元の意図文の de re 理解として [a] (この多義性も論点となる) が、de dicto 理解として残りの二つが得られる。[b] は意図時点で指示される行為についての未来の遂行を、[c] は未来の時点で指示される行為についてのその時点での遂行を内容とする意図状態を表わす。Graff 論文の主題はこれに相当する欲求文の洗練化にあるが、興味深いことに、欲求時点に後続する、命題内容の成立時点の世界状態を考慮しつつ、指示対象の通時的同一性の検討もなされている。しかしこの論点は、欲求時点と内容の成立時点の各々に対して現在(<NOW>)を定位した式(「時制描写」)を別個に用意し、両者の対比のもとで、確定記述の指示対象の通時的同一性が考察される必要性を示唆している。効力前提の妥当性はまさにここに関わる。そこで本発表では、上の意図文の定式化について、意図主体(S₁)に現在を定位した先行時点の式、

[X1] [the action] $\hat{\phi}$ <NOW>Int(S₁, <FUTURE> S₂ do ϕ)

[Y1] <NOW>Int(S₁, [the action] $\hat{\phi}$ <FUTURE> S₂ do ϕ)

[Z1] <NOW>Int(S₁, <FUTURE>[the action] $\hat{\phi}$ S₂ do ϕ)

および、命題内容に含まれる遂行主体(S₂)に現在を定位した後続時点の式、

[X2] [the action] $\hat{\phi}$ <PAST>Int(S₁, <NOW> S₂ do ϕ)

[Y2] <PAST>Int(S₁, [the action] $\hat{\phi}$ <NOW> S₂ do ϕ)

[Z2] <PAST>Int(S₁, <NOW>[the action] $\hat{\phi}$ S₂ do ϕ)

の六つの式の対比を通して、意図対象となる行為([the action])の通時的同一性の成否とその仕組みについて考察する。

私見では、時制描写の独立性を認めるなら、行為の指示を当該の時制描写内に留める点において、基礎的描写は[Y1]と[Z2]である。そして、そこから構成される[Y2]と[Z1]を介して、無時制的な時点間の相関に訴えるB論的な式が提供される。効力前提は、その式の de re 理解によって支えられている。だが、この一連の思考操作は正当な理由を欠くため、効力前提および「選択」は棄却可能である。しかしまた、[Y1]と[Z2]から与えられる de re 理解である[X1]と[X2]が、「選択肢」のわれわれの直観的な理解を支持すると考える。最後に、「選択」の代案として、時制描写を跨がない仕方での自由意志理解の方針を論じたい。

【文献】Graff, D. (2003), "Desires, Scope and Tense," *Philosophical Perspectives*, vol. 17, pp. 141-163.